
檻の中から

Faye

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

檻の中から

【Nコード】

N0924K

【作者名】

F a y e

【あらすじ】

ある宗教団体に入る少女、嘉山セーラ。

学校に通うことも許されず、ただ社会と隔絶された毎日を送る。それでもそれが正しいと思っていた。あの日までは。

果たして、セーラがそんな毎日から抜け出せる日は来るのか？

プロローグ（前書き）

はじめに。

この小説はフィクションであり、
実在の団体、人物、教団とは一切
関係ありません。
楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ

「セーラ、遅刻するぞ。急ぎなさい」

「セーラ、弁当と水筒はちゃんと持った？」

両親の声がする。

今日は待ちに待った遠足の日。運動公園まで、クラスのみんなと行く予定だ。

「姉ちゃんだけずるい。リベカも行く」

妹がごねる。妹リベカはまだ三歳。学校に通う日をそれはそれは楽しみにしている。

「行つてきます！」

体育着に身を包み、セーラは家を飛び出した。

「ほら、マリヤ姉ちゃんも見送りなさい」

大急ぎでバス停に走るセーラを、家族が温かく見守る。

今日は晴れ。

涼しい風も吹いており、遠足にはもってこいの天気だ。

セーラのお下げ髪が、心地よい風に揺られ、空になびく。

小さなリュックサックの中に入っているのは、まだ温かいお弁当と、真つ赤な水筒、そして三百円分のお菓子。昨日、近所のスーパーで悩み抜いた末買った物だ。

まだ幼いセーラの視界には一点の曇りもなく、未来に対する不安もない。優しい母と、強い父に愛され、幸せに育っていく子どもそのままだ。

そして、このときセーラは、こんな日々が永遠に続くのだと信じて疑わなかった。

第一章（１）

カタカタ、シューシュー、と音がする。

パン焼き機の音だ。四つあるので、全部同時に稼働させるとなかなかうるさい。

側にあるダイニングテーブルを見やって、セーラは小さくため息をついた。

ダイニングテーブルに並んでいるのは、大袋入りの小麦粉、オリブオイルの大瓶、そしてココナッツミルク。小麦粉は少しこぼれていたし、天板の上で直接パンを練ったのであろう、テーブルは油でテカテカ光っていた。

「リベカ、片付けもちゃんとしなさい」

セーラは隣の部屋で犬と戯れている妹を呼んだ。

・・・リベカはいつもこうだ。全てにおいて、中途半端。今はセーラという姉が尻拭いしているから良いものの、セーラとていつまでもここにいられるわけではない。もう、１８になったのだから。

内心呆れる姉の気持ちには気づかず、リベカはゆっくりした足取りでやってきた。

彼女が履いているのはくるぶしまで隠れる黒いロングスカート。

お下げにしている髪は、ここ数年でかなり長くなった。

リベカももう１３歳。そろそろ、家事をバトンタッチしても良い頃だ。

セーラはもう一度、リベカに聞こえないように小さくため息をついた。そして、郵便物を取りに行くと伝え、キッチンを出た。

嘉山家の郵便受けは、玄関を出たすぐ側にある。父親の手作りのもので、なかなかかわいらしい。

ポストを開くと、中には手紙が数通入っていた。請求書が二通、

教団からのお知らせが一通、そしてセーラへの手紙が一通。

セーラは飛び上がって喜んだ。

差出人は大峰カナ。小学校の時の、同級生だ。

小学校を卒業してからというものの、セーラは同じ年の女の子というものに会ったことがなかった。いや、そればかりではない。連絡を取っているのだから、カナだけだった。

早く手紙を読みたい衝動をこらえて、家に入る。リビングテーブルの上に他の手紙を置いてから、セーラは二階に上がった。

リベカへ。

手紙は、そう始まった。

リベカ、久しぶり！元気だった？

私はもうすぐ高校を卒業するんだけど、今学校が自宅研修だから、とっても暇なの。で、もし良ければ一緒に遊びに行かないかなーと思って。あ、もちろん、無理だったらいいよ。

リベカ、Y市でバイオリン習ってるって言ってたでしょ？だから、その後でも会えるのなら是非会いたいな。

そうそう、最近、うちでもトマトを育て始めたよ。実がついたので、写真送るね。

カナの手紙は、こんな調子で、あとは他愛のない世間話で綴られていた。

しかし、セーラは、最初の三行に目が吸い寄せられた。カナが、自分に会いたいと言ってくれている。

セーラは今まで、両親の言うことに、必ず従ってきた。

両親が菜食にするといいだした時は黙って従ったし、学校は通わ

ずホームスクールにすると言いだした時も反抗しなかった。セーラの将来だって、勝手に決められてしまいそうだけど、セーラはそれについて文句をいうつもりなど毛頭なかった。

なぜならば、それが正しいと信じているからだ。

しかし、カナが所属しているような外の世界ー普通に学校に通って、同年代の友達を作り、家にテレビがあるような世界に、全く憧れがないと言えば嘘になる。

外の世界の住人であるカナと、久しぶりに会って話をしてみたい。リベカは素直にそう思ったのだった。

第一章(1)(後書き)

初めまして、Faye^{フエイ}です。

初めての小説になります。少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0924k/>

檻の中から

2010年10月28日04時53分発行